

第2期第6回インクルーシブ教育（支援児包容教育）推進委員会 議事録

□開催日時：平成29年3月3日（金）14：30～17：00

□開催場所：駅北庁舎 4階 災害対策本部室

□出席者（敬称略）

- ・委員：田口明 宇野宏幸 中野正大 安藤克己
奥田紳二 保母朋子 中宿清美 坂田俊広
加知昌彦 水野育美 横井美代子 若林恭子 瀬瀬育恵
- ・事務局：渡辺哲郎教育長 永治友見副教育長 鈴木稔朗教育次長
市原浩代 安井宏治 南谷美和 堀江美鈴
永井清 柳原伸哉

1 あいさつ

教育長

平成26年度から文部科学省の委託事業を受けて早期支援事業を進めてきた。さらに今年度は市教委で1年間延長して取り組んできた。また、個別の教育支援計画についてはしっかりと作成されるようになってきた。さらに、中高の連携も初の試みとして行ってきた。来年度は、宇野先生をお迎えして特別支援教育コーディネーターの資質向上の研修を行う予定である。これからも推進していくのでご意見をお願いしたい。

2 検討内容

- (1) タブレット端末を活用した発達障がいの可能性のある児童生徒への支援について

委員

精華小でもタブレット端末を活用して支援をしている。その中で仲間同士の助け合いがあることがとてもいい支援となっている。周りの子どもの理解が進むことで人的環境のユニバーサルデザイン化となっている。北栄小の実践では、多くの先生方がICTを使いこなしていることに驚いた。ユニバーサルデザインの授業づくりはほんの少しの工夫でもっとできるはずである。黒板に貼り付けて提示する資料の文字の大きさなど、子どもの目線で考えれば気づけるはずである。

委員

養正小ではどの学年でもICTを活用して支援をしている。小4までなかなか教室で学べなかった児童がタブレット端末を活用したことをきっかけに自信をつけることができ、小6では教室で共に学ぶことができるようになった事例がある。精華小の国語で必要な子どもだけに活用させる方法も取り入れたい。

委員

陶都中では、教室環境のユニバーサルデザイン化、授業づくりのユニバーサルデザイン化、人的環境のユニバーサルデザイン化を行ってきている。集団で学ぶことが楽しいと感

じることができることによって、個の学習への意欲が高まってきた事例があった。今はユニバーサルデザインとアクティブラーニングの融合を目指した取組を行い、教師の出場を減らして生徒主体の学習を進めている。

委員

北陵中では、生徒が分かるできる実感が生まれてきたことで意欲化ができた。また、小集団でも活用したことで学習へ向かう気持ちが増えてきた。タブレット端末を活用した支援の効果を感じている。中3では学び直しの機会にもなっている。教師のICTの活用の技術も高まっており、どんな成果があるのかを検証するところまで進んでいる教師もいる。

委員

我が子のときはここまでICTを活用した支援がなかった。できないことを「がんばれ」と励まされることでつらくなってしまうこともある。ICTだとそうなる前に支援をすることができる可能性がある。

委員長

子どもが支え合うことで自己肯定感が高まり、集団の学びづくりとつながっていく。それが他の教育活動へも転化していく。ハード面以上に教師が子どもの目線で学びを見つめ直すことがユニバーサルデザイン化である。

副委員長

多治見市の取組には勢いがある。タブレット端末や大型モニターなどの実践はどんどん進めて欲しい。授業を参観したが生徒主体の学習であった。さらに市教委として他校へ浸透させるための手立てはあるのか。

事務局

今後、市内に広げるためには、よい実践を集めて紹介をしたり、市内の研究発表会にて公開授業の中で見てもったり、いろいろな研修会の中の一部に位置付けていきたいことを考えている。

(2) 就学先決定の仕組みの見直しについて

委員

巡回相談を行うことで発達支援センターは幼稚園・保育園と支援の考え方を共有することができた。保護者への就学相談が以前よりもスムーズに行くようになった。4月の就学の勉強会や小学校見学も有効に働いている。保護者にとって就学に向けて緩やかな変化となってきた。

委員

巡回相談に参加することで学ぶことがあった。また、特別支援学校への就学を考えてい

る子どもについては、情報の共有だけでなく入学までの支援についてもさらに充実してきている。保護者も安心して就学を向かえているのではないかと。

委員

巡回相談をきっかけに医療につながることもあり、有効な支援となっている。

委員

園では困難さが見えにくい子どものことでも巡回相談によって支援方法とその背景を明確になることがあり、保育に役に立っている。

委員

発達支援センターの訪問支援事業も巡回相談についても、的確な助言があり保護者への就学相談にも役立っている。

委員

保護者としてはそんなに巡回相談でこんなに多くの方に見てもらっているとは思ってなかった。できればそうした巡回相談の内容について保護者に知らせて欲しい。

委員長

定期的に粘り強く保護者と相談をしていくことが子どもの支援につながる。

委員

いろいろな分野のメンバーで巡回相談をしている。市教委としてアピールしてもよいのではないかと。

副委員長

多治見市ならではの巡回相談がとてもうまく機能している。文部科学省が10年前に構想していたことを多治見市では実行ができています。障がいがある子どもに対してバリアフリーの場を提供するだけでなく施設の一部改修工事もしているなど、柔軟な対応がよい。多治見市のよさは巡回相談と就学先決定についての教育相談が一体化していることにあります。

委員

保護者のニーズに応じた巡回相談も行ってもよいのではないかと。

委員

保護者にとってもありがたい巡回相談である。保護者に周知して欲しい。

(3) 居住地校交流の取り組みの推進について

委員

特別支援学校でも市教委と同じところを目指している。ただしどの交流もうまくいっているわけではない。担任との折り合いが悪いとか、訪問した子どもがお客さんとなるケースもある。互いに先生方が理解し合えることが大切である。中学では保護者が希望しないケースがあるため、中学でのよい交流の事例を増やして提供したい。

委員

幼稚園や保育園で子ども同士がどう関わったのかが居住地校交流につながっている。例えば、行事に全員参加する方法を子どもが話し合っていて決めている。そうしたことが土台となっている。

委員

小学校では、子どもたちが出迎えてくれている。互いにうれしい様子である。集団の力で子どもが育つことも多い。

委員

多治見中では4校の合同の交流会がある。継続しているため、子どもが会うことを楽しみにしている。土と版画展でも特別支援学校の作品も出品されるようになり、よい交流となっている。

委員

交流ではよい笑顔があり、たいへん貴重な経験となっている。双方の学びがあるということは一人一人に合わせているということでもある。過度な負担はプレッシャーになるので気をつけたい。

委員長

中学での交流は給食や休み時間など参加しやすいところで行っている。

(4) 特別支援教育コーディネーターの専門性の向上

副委員長

この研修の大きなねらいは、多治見市の次世代を担う人材育成にある。そういう人たちがさらに市全体のレベルアップをする。特徴としては、年間5回の研修と実践を交互に行う継続型の研修であること。また、実践発表をすることで他の特別支援教育コーディネーターと共有することができ全体のレベルアップにつながる。

委員長

この研修システムは、校長会の承認も得ているので、これを来年度は推し進めていって欲しい。

(5) 支援の連続を図る関係機関の連携の充実

委員

高等学校から特別支援学校のセンター的機能のニーズが増えてきている。特に高校では特別支援教育の必要性が増えてきている。幼稚園・保育園から中学校までのよい支援をどう高等学校へつなぐかが重要である。

委員

高等学校へ送り出した生徒が高等学校での不適応が減り学校生活が楽しくなっていくことを中学校側も願っている。

委員

今の高等学校では発達障がいの可能性のある生徒への対応が一番難しくなっている。そのため、幼保小連絡会のような取組が中高でもできるとよい。入学後の5月ぐらいに位置付けると効果的ではないだろうか。

副委員長

高等学校へも巡回相談をしてはどうだろうか。多治見市在住で高等学校にいる生徒については多治見市がフォローアップするというシステムがあると一貫して生徒を見届けていくことが可能である。

委員

今はすべての高等学校に発達障がいの生徒がいる。社会性が弱いため不適応を起こしている。また、大学入学後に引きこもる事例もある。フォローするシステムが必要である。

委員長

高等学校の教職員が1人も取りこぼさないで卒業させたいという熱い思いがあるのが分かって驚いた。今後は、合格発表後に担当者が直接情報交流をすることも必要である。

(6) 多治見市がめざすインクルーシブ教育について

委員長

インクルーシブ教育は今の多治見市の教育の柱である。

副委員長

多様な学びの場の整備において「特別支援教室」という言葉があるが、文部科学省がやろうとしていたが実現ができていないことである。とても大切なことであり特別支援学級の柔軟な活用など余力があるならうまく活用していけるとよい。同時に教職員が力量をアップさせることも必要である。こうしたことが進んでいくと学びの場の境目がなくなっていくはずである。

委員

就学先決定の仕組みの充実においては、学校だけでなく保護者のニーズに応じて巡回相談をするというようにしてはどうだろうか。諸機関との連携の強化では、高等学校との連携を含めたらどうか。

(7) 各委員から多治見市のインクルーシブ教育に期待すること

委員

全ての教職員が発達障がいに対しての理解が必要である。これからもユニバーサルデザインの授業づくりのよい実践を広げて欲しい。

委員

この委員会での内容を自校へも取り入れたい。

委員

高等学校の連携まで考えられるところまでプランを進行することができてきた。

委員

多治見市のインクルーシブ教育は進んでいる。近隣の他市へも広がるとうれしい。東濃地区へアピールをしてほしい。

委員

周りの教師や子どもの理解がとても重要である。困難さがあり苦しんでいるところへの励ましは逆に苦しくなることも知る必要がある。

委員

就学先決定については保護者へのていねいな対応がある。障がいをもつ子どもの保護者は就学が不安でしかなかったのが軽減されつつある。さらにそれが期待や喜びになるところまで進めて欲しい。

委員長

すべての子どもたちが伸びるこのインクルーシブ教育は学校経営の柱である。

副委員長

この委員会の忌憚のない意見がありまたそれがプランに反映されている。多治見市の勢いがとてもよいのでこれを失わないで進めて欲しい。あくまで地域のリソースをうまく活用して、目指す方向だけは関係者で共有して進めてもらいたい。

委員

子どもは多様である。正しく子どもを捉えて、正しく支援をすることは難しいことであ

る。今の人的環境や予算でどれだけのことのできるものであろうか心配もある。教職員への負担が増えることも決して子どもにとってよくないことである。

委員

キキョウスタッフが不足している。特に就学をする支援が必要な子どもの保護者は不安である。特別支援教育コーディネーターの動きは園によっても違う。

委員

キキョウスタッフの増員をしてほしい。支援を必要とする子どもが心から楽しく学校へ行って欲しい。

委員

周りの子どもが理解をできることで、みんなが助け合えるようになる。そうした子どもたちが大人になるとやさしい社会になるのだろう。公立の高等学校がこんなにフォローアップしてくれるとはうれしい。でも退学する子どももいる。岐阜市では中学生を対象とした通級指導教室を放課後の時間に開設するということが行われる。こうしたことが多治見市でもできるとよい。

委員

子どもためにこんなにいろいろしてくれているとは思わなかった。保護者に多治見市の取組をアピールして欲しい。

委員

多治見市のインクルーシブ教育は全国的に見てもたいへん進んでいる。今後も推進して欲しい。それと同時に、もう少し予算をつけて欲しい。

委員

通常学級での困難さのある子どもが厳しすぎる指導で不適応を起こしている事例がある。教職員にさらに理解を促して行ってほしい。

3 あいさつ

次長

自分にはこういうよさと弱さがあると言うことを自分の口から述べ、それが受け入れられるような学校や社会を構築できることが、目指しているところである。心のユニバーサルデザインと呼べるのではないだろうか。

教育長

ここまで保健、福祉も連携をすることで進めてくることができた。さらに発展をさせていきたい。たいへん熱心な議論をありがとうございました。